

ヘミングウェイと スペイン内戦の 記憶

もうひとつの
作家像

船山良
Funayama Ryo

レトリックで読む『誰がために鐘は鳴る』
と元義勇兵との書簡を通して綴る
作家の実像!

「本書は、従来のヘミングウェイ研究を踏まえた上で、
通説に大胆に切り込んでいる。ヘミングウェイ研究
ひいてはアメリカ文学研究に一石を投ずるであろう。」
(中嶋嶺雄・国際教養大学学長／国際社会学者)

彩流社

ヘミングウェイと
スペイン内戦の記憶

もうひとつの
作家像

船山良

彩流社



9784779113024



1920098035007

ISBN978-4-7791-1302-4
C0098 ¥3500E

彩流社

定価(本体3,500円+税)

ヘミングウェイと スペイン内戦の 記憶

もうひとつの
作家像

書き終えて思うのは、二〇
紀の激動に身を投じ、時代と
己にひたむきに向き合った作
の誠実さである。一九三九年、
ヘミングウェイは「スペインに
るアメリカ人」で「亡き我らの友
は「かつてスペイン共和国を信
そのために戦った善良で素朴で
正直なすべての人々の胸郭のな
かに生きる」と書いたが、それは
そのまま作家自身に当てはまる。
その後の世界情勢の激変を考慮
したとき、その心情を保つこと
がいかに困難だったかは推察す
るに余りある。

(本書「あとがき」より)

序 文

二〇〇五年九月、中央教育審議会は、「新時代の大学院教育」を答申した。私は同審議会大学分科会大学院部会長を務めているが、その答申は博士学位の在り方について、次のように述べている。学位は「学術の中心として自律的に高度の教育研究を行う大学が、大学における教育の課程を修了し当該課程の目的とする能力（博士課程については、専攻分野について研究者として自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力等）を身に付けた者に対して授与するもの」とする。これが原則であり、国際的な共通認識でもある。

一方、我が国における学位の授与状況は、分野によってはいまだ不十分と言わざるを得ない。特に人文・社会科学系の標準修業年限内の学位授与率は、改善されてきてはいるものの、依然として博士課程入学者の約三〇%にとどまっている。論文博士と課程博士が並存してきた経緯を考慮しつつも、私としては、スクーリングとしての大学院教育の強化が図られた上で、原則として大学から授与するかたちの論文博士を廃止することが、博士学位の国際的通用性からしても適当ではないかと考えている。

このような我が国の大学院の状況において、船山良一君が標準修業年限で学位を取得したのは喜ばしいことである。同君は、私の東京外国語大学時代の大学院地域研究研究科修士課程での教え子である。彼はその後、長野大学

に数年勤めた後、郷里の短期大学に移って教鞭を執り、現在に至っている。地域研究は比較的歴史の新しい学問分野で、要約して言えば、現代の生きた国際社会を分析の対象とし、既成の学問領域におけるディシプリンの枠を越えた外国研究ないしは異文化研究だと言うことができる。

船山君は、新潟大学で英文学を学んでから、東外大地域研究研究科に入ってきたのであるが、今回の本は、英米文学研究と現代史研究が溶け合い、彼の経歴にふさわしい成果となっている。

かつて若き日にジョージ・オーウェルの『カタロニア讃歌』や『一九八四年』に共感し、また来たる二〇〇八年六月にはアンドレ・マルローについての国際シンポジウムを国際教養大学で開催する予定の私としては、もう四〇年近くも前にキューバのハバナでヘミングウェイの旧居を訪ね、メキシコシティのコヨワカンではトロツキーが暗殺された現場を訪れた想い出とともに、船山君の今回のヘミングウェイ研究の斬新な視角に大いに共感を覚えた次第である。

私は、専門分野を異にするので、詳しい評価は控えたいが、本書は、従来のヘミングウェイ研究を踏まえた上で、通説に大胆に切り込んでいる。ヘミングウェイ研究ひいてはアメリカ文学研究に一石を投ずるであろう。多くの読者を得て、批評されることを期待している。

二〇〇七年九月二八日

国際教養大学学長 中嶋 嶺雄

目次 ☆ヘミングウェイとスペイン内戦の記憶——もうひとつの作家像

序文

中嶋嶺雄 1

序章 文学と歴史における記憶 9

第1節 問題提起と研究方法 10

- 1 はじめに 10
- 2 歴史学における記憶 10
- 3 文学における記憶 15
- 4 文学と歴史の相違 16
- 5 ヘミングウェイとスペイン内戦の記憶 23

第2節 オーウエルとマルローのスペイン内戦の記憶——問題提起として 27

- 1 はじめに 27
- 2 ジョージ・オーウエル 27
- 3 アンドレ・マルロー 32
- 4 スペイン内戦と幻滅 37

第1章 ヘミングウェイ『誰がために鐘は鳴る』批評史序説 41

第1節 後期ヘミングウェイ研究史として 42

- 1 はじめに 42
- 2 同時代批評 43
- 3 一九六〇年代初頭——アレン・ガトマン、カールロス・ベイカー、ライオネル・トリリング 49

- 4 一九七〇年代と八〇年代——リнда・ワグナー、ジョン・チューニセン、ほか 55
- 5 一九九〇年代——リーナ・サンダスン、マイケル・レイノルズ、ほか 57
- 6 まとめ 62

第2章 元国際義勇兵アルヴァ・ベッシーの批評 67

第1節 対話のレトリック『誰がために鐘は鳴る』試論 68

- 1 はじめに 68
- 2 ベッシー批評の要点 69
- 3 ベッシー批評の検討、その1 72
- 4 島崎隆の現代認識論から 75
- 5 ベッシー批評の検討、その2 77

第3章 後期ヘミングウェイ作家論のために 83

第1節 もうひとつの失われた世代——後期ヘミングウェイについて 84

- 1 はじめに 87
- 2 書かれた背景 88
- 3 「誰がために鐘は鳴る」をめぐる攻撃 90
- 4 冷戦下の交流 92

第2節 ふたつのヘミングウェイ像 105

- 1 はじめに 105
- 2 アメリカの写真集 105
- 3 キューバの写真集 108
- 4 まとめ 113

第3節 ヘミングウェイの政治思想についての一考察 117

- 1 はじめに 117
- 2 これまでの代表的見方 118
- 3 スティーヴン・クーバー「ヘミングウェイの政治思想」 120
- 4 内戦帰還兵との交流 124
- 5 FBIファイル 127
- 6 一九三九年の到達点 129
- 7 まとめ 133

第4章 もうひとつのヘミングウェイ像 139

第1節 ミルトン・ウルフとのねじれた友情 140

- 1 はじめに 140
- 2 戦場での交流 140
- 3 元義勇兵への書簡 144
- 4 冷戦下の反共キャンペーン 150
- 5 屈折した友情 154

第2節 ヘミングウェイのエドウィン・ロルフ宛書簡——通説の再検討 159

- 1 ロルフ宛書簡の意義 159
- 2 通説 160
- 3 検討 165

第5章 冗談・悪態・レトリック——『誰がために鐘は鳴る』再考 187

- 1 はじめに 188
- 2 「希望」の特徴 188
- 3 「誰がために鐘は鳴る」について 194
- 4 冗談・悪態・レトリック 198
- 5 おわりに 210

第6章 『老人と海』——労働と共同体の物語として 213

- 1 はじめに 214
- 2 批評 214
- 3 労働 218
- 4 社会性のない物語か 228
- 5 老人は敗北したか 235
- 6 おわりに 238

終章 まとめにかえて 243

第1節 五〇年代とヘミングウェイ 244

1 五〇年代アメリカとヘミングウェイ 244

2 キューバ革命とヘミングウェイ 248

第2節 一九三九年のヘミングウェイ 264

付属資料 エドウィン・ロルフ宛書簡の解題 285

あとがき 339

写真出典一覧 16

引用文献 10

引用表記、日本語訳及び略号 9

索引 1

序章 文学と歴史における記憶

あとがき

本書は二〇〇六年三月、新潟大学大学院現代社会文化研究科で博士（学術）を取得したときの学位論文に、出版にあたり若干の修正を加えたものである。博士課程に在籍することには独特の苦勞もあったが、ヘミングウェイの知られざる姿を追うことに没頭できた三年間は充実していた。

筆者は元々イギリス文学文化を専門としている。それがヘミングウェイに取り組むことになったのは、博士課程では、これまでの研究業績とは異なる新しいテーマに取り組むことを求められたからである。八年ほど前に勤務校における英文講読の授業で『誰がために鐘は鳴る』を学生と読んだとき、これほどの「大作」がいまはほとんど顧みられないのはなぜだろうかという素朴な疑問が浮かんできた。本書のテーマはそこに胚胎している。追いかけて辿り着いた結論は筆者にとっても意外だった。

書き終えて思うのは、二〇世紀の激動に身を投じ、時代と自己にひたむきに向き合った作家の誠実さである。一九三九年二月、ヘミングウェイは「スペインに眠るアメリカ人」で「亡き我らの友」は「かつてスペイン共和国を信じ、そのために戦った善良で素朴で正直なすべての人々の胸郭のなかに生きる」と書いたが、それはそのまま作家自身に当てはまる。その後の世界情勢の激変を考慮したとき、その心情を保つことがいかに困難だったかは推察するに余りある。

- 島崎隆『対話の哲学——議論・レトリック・弁証法』（みずち書房、1988年）
——『思想のシビルミニマム』（大月書店、1991年）
立花隆編『サル学の現在』（平凡社、1991年）
中嶋嶺雄『国際関係論』（中公新書、1992年）
深澤安博他『スペイン現代史』（大修館書店、1999年）

写真出典一覧

カバー

- フンシア、クラウディオ・イスキエルド『写真集 アーネスト・ヘミングウェイ』
大林文彦訳（海風書房、1999年）p. 43.

第3章第2節

- 写真① Sotolongo, Roberto Herrera. *Ernest Hemingway Rediscovered*. Ed. Norberto Fuentes. New York: Scribner's, 1988. p. 15.
写真② *Ibid.*, p. 15.
写真③ *Ibid.*, p. 27.
写真④ *Ibid.*, p. 76.
写真⑤ *Ibid.*, p. 94.
写真⑥ *Ibid.*, p. 146.
写真⑦ *Ibid.*, p. 112.
写真⑧ Nelson, Cary, & Jefferson Hendricks. *Edwin Rolfe: A Biographical Essay and Guide to the Rolfe Archive at the Univ. of Illinois at Urbana-Champaign*. Urbana: Univ. of Illinois Press, 1990. p. 77.

多くのヘミングウェイ研究がある。そのなかで本書は批評や批判に曝されてゆくであろう。学位取得とはまた別の緊張感を持って本書を開きたい。

最後に、快く出版をお引き受けいただき、編集上のこちらの無理なお願いを聞いてくださった彩流社の茂山和也氏に深甚なるお礼を申し上げます。さらに東京外国語大学大学院地域研究研究科に在籍以来、筆者のささやかな研究をいつも暖かく励ましていただいた現国際教養大学学長の中嶋嶺雄先生の学恩に記して感謝したい。一〇年間の役所勤めの後、大学に進み、そしていま学界の片隅に生息しているのは、東外大地域研究研究科で過ごした濃密な二年間を除いては考えることができない。その研究科の主要な担い手であられた中嶋先生のご指導が得られなかったら拙著も生まれなかったらと思うからである。

二〇〇七年九月二六日

船山良一

2007 年 11 月 30 日

国際教養大学

学長 中嶋嶺雄先生

拝啓

例年にない早い冬の訪れで、米沢地方は白一色の世界になりました。里山は紅葉のままに雪をかぶっています。

このたびの拙著の出版にあたって暖かいご支援をいただき誠にありがとうございました。ようやく刊行にこぎつけることができました。実を言うと、奥付にあるように11月20日一度出版されかけたところでした。ところが流通に回ってから、先生への謝辞を述べた小生の「あとがき」が欠けていることに気づき、急いで回収して、また作り直すという想定外のことが起りました。それで出版が10日遅れることになりました。いまのところ若干の誤植が見つかり、正誤表で対応したところですが、全体として小生にとっては予想以上の本に仕上がりました。これも先生に多大なご協力をいただいたお蔭です。心より御礼を申し上げます。

今回の出版を通して、本を世に出すことの苦労を改めて認識しました。学位論文は審査委員の人に読んでもらい評価を受けるというものです。それを出版するというのは不特定多数の読者を想定して、その評価に耐えうるものを公にすること、学位取得とは違った独特の苦労があることを経験しました。先生のご高著が100冊近いというのは、やはり信じ難いことです。

先生から「序文」を頂戴し、それはまた帯にも引用させていただいたので、本を余り読まない時代ではありますが、長く多くの人に読み継がれる本になって欲しいと願っております。

先生はご多忙のこととは存じ上げます。先生のお時間のいただけるときに一度、秋田にお伺いして短時間でも直接御礼を申し上げたいと考えます。先生のご日程については、秘書の鈴木様と連絡を取らせていただきます。

ご支援に衷心より感謝しつつ、先生のご健勝と国際教養大学のご発展をお祈り申し上げます。敬具

船山良一
船山良一

追伸 一冊は貴学図書館に置かせていただければ幸いです。